

# 史料紹介・上杉顕定文書集

黒田基樹

はしがき

本文書集は、戦国初期の関東管領山内上杉顕定の発給文書・受給文書を集成し、編年順に配列したものである。戦国期の関東上杉氏に関しては、関係史料の集成はみられていないのが現状である。研究進展のためにはそれらの集成は不可欠のことであり、そのためここでは、その基礎作業の一つとして、上杉顕定の発給文書五九点、受給文書一一点、計七〇点を集成し、その他、家宰・宿老・奉行人等の副状・奉書一二点を参考文書としてあわせて収録した。

収録にあたっては、文書ごとに通番を付し、発給文書については宛名と文書形式によって示し、受給文書については発給者と文書形式によって示した。また出典史料名については一般的な史料名を採用した。翻刻形式についても、一般的な史料集に準じるかたちをとり、注記については人名・年代など、必要最小限のものにとめている。

なお一部の文書については、写真版による確認をとれていないものがある。今後それらの確認作業をすすめていく必要があるが、ここでは現時点での作業成果としてまとめておくことにしたい。また今後においては、憲房・憲寛・憲政の歴代、および長尾氏を始めとする譜代被官についても同様の作業を行ってきたいと考えている。これらによって、戦国初期の関東上杉氏研究の進展に、多少とも寄与することができれば幸いである。

## 1 豊島勘解由左衛門尉宛感状（豊島宮城文書）

去八日於上州綱取河原合戦之時、数ヶ所被疵切乗馬、家人等討死・被疵之条、粉骨之至、神妙候、弥可励忠節候、謹言、

(応仁二年)  
十月十四日 竜若

豊島勘解由左衛門尉殿

2 大熊伊賀守宛感状写 (記録御用所本古文書一)

去八日於上州綱取河原合戦之時，家人被疵之条，粉骨之至，神妙候，弥被抽忠節候者，可為感悦候，恐々謹言，  
(応仁二年)  
十月十四日 竜若在判  
大熊伊賀守殿

参考1 大熊伊賀守宛長尾景信副状写 (記録御用所本古文書一)

去八日於当国綱取河原合戦之時，自身被抽粉骨，御被官被疵条，御忠節之至候，仍被成御感状候，(足利義政)(足利政知)京都様・豆州様へも御注進候，定可有御感候，弥被励御忠勤之者，忠広等可申沙汰候，恐々謹言，  
(応仁二年) (長尾)  
十月十四日 景信在判  
大熊伊賀守殿

参考2 大熊伊賀守宛長尾頼景副状写 (記録御用所本古文書一)

去八日於当国綱取河原合戦之時，自身被抽粉骨，御被官被疵条，御忠節之至候，無是非候，仍被成御感状候，并左衛門尉書状添進候，(長尾景信) (足利義政)(足利政知)京都・豆州様へも御注進候，寔可有御感候，恐々謹言，  
(応仁二年) (長尾)  
十月十四日 頼景在判  
大熊伊賀守殿

3 細川勝元奉書写 (文明三年造内宮役夫工米記)

造 内宮料関東国分役夫工米事，早守事書之旨，嚴密被相懸之，可被究濟之由，所被仰下也，仍執達如件，  
(細川勝元)  
文明三年三月廿七日 右京大夫在判  
上杉四郎殿 「右京大夫勝元」

4 豊島勘解由左衛門尉宛感状 (豊島宮城文書)

去十五日足利庄赤見城責落時，被官人等被疵之条，神妙(也)□，弥可励粉骨也，謹言，  
(文明三年)  
四月十六日 顕定 (花押1)  
豊島勘解由左衛門尉殿

5 豊島勘解由左衛門尉宛感状（豊島宮城文書）

去廿三日上州佐貫庄立林要害中城攻落時，親類彦五郎并家人等被疵之由，長尾  
(景信)  
左衛門尉註進到来，尤以神妙，弥可勵戰功候，謹言，  
(文明三年)  
五月廿八日 顯定（花押1）

豊島勘解由左衛門尉殿

6 豊島新次郎宛感状（豊島宮城文書）

去廿三日上州佐貫庄立林要害中城攻落時，家人被疵之由，長尾左衛門尉註進到来，  
(景信)  
尤以神妙，弥可勵戰功候，謹言，  
(文明三年)  
五月廿八日 顯定（花押1）

豊島新次郎殿

7 大熊伊賀守宛感状写（記録御用所本古文書一）

去廿三日上州佐貫之庄立林要害中城攻落時，家人被疵之条，尤以神妙候，弥可動粉  
骨候，謹言，  
(文明三年)  
五月廿八日 顯定在判

大熊伊賀守殿

8 足利義政御内書写（御内書符案）

「同前（從飯肥案文出之）」  
(持政) (成治) (秀綱) (景信)  
小山下野守・小田太郎・佐野愛寿等事，以計略參御方云々，依之差遣長尾左衛門尉，  
足利庄赤見并樺崎城則時攻落之，南式部大輔父子以下数輩討捕之条，尤以神妙，仍  
太刀一腰友成遣之候也，  
(文明三年)  
同日（五月三十日）

上杉四郎とのへ

参考3 横瀬信濃守宛長尾景信書状写（集古文書六十六）

能啓候，抑今度宇都宮為体，無是非次第候，仍体当方在城衆可被成勇之由承候間，  
(上杉顯定)  
令披露，屋形証状取進之候，園田事之半旨候之間，重而証状可取進候，委細大沢方  
可有披達候，恐々謹言，

文明三

長尾

六月六日 左衛門尉景信判  
謹上 横瀬信濃守殿<sup>(国繁)</sup>

9 足利義政御内書写(御内書符案)

「同前(飯肥奉案文出之)」  
宇都宮右馬頭事<sup>(正綱)</sup>、依連々計略、近日参御方之旨註進到来、尤神妙、仍遣内書之訖、  
此刻方々時宜弥廻了簡、早速遂静謐者可為本意、巨細猶右京大夫可申下候也、<sup>(細川勝元)</sup>  
<sup>(文明三年)</sup>  
同日(八月十九日)  
上杉四郎とのへ

参考4 白河宛長尾景信副状(白川文書)

如仰関東御事、漸属 都鄙之御本意候間、至于我等式日出度畏入存候、就其為祝言御馬一疋(鶴毛印/雀目結)引給候、恐悦千万存候、如此御礼、態以使者可申入候、先祝儀計太刀一腰黒鞘・段子一端萌黄・唐瓶子一染付令進之候、左道之至恐入存候、如何様重為御礼可申入候、恐々謹言、  
<sup>(文明三年)</sup> 壬八月十六日 <sup>(長尾)</sup> 左衛門尉景信(花押)  
<sup>(直朝)</sup>  
謹上白河殿 御報

10 白河修理大夫入道宛書状写(白河証古文書)

今度関東之時宜、漸可属京都御本意之趣候間、於当方も快然候、連々御忠心之間、定可為御同意候、仍自京都様被成<sup>(足利義政)</sup> 御内書・御教書候間、付進之候、幸向結城調儀之時分候間、聊有御出陣、御忠節可然候、於御忠賞者可申沙汰候、委細之旨、定長尾左衛門尉<sup>(景信)</sup>可申候、恐々謹言、  
<sup>(文明三年)</sup>  
閏八月廿日 藤原顯定(花押1)  
<sup>(直朝)</sup>  
謹上 白河修理大夫入道殿

11 足利義政御内書写(御内書符案)

「同前(飯肥奉案文出之)」  
<sup>(足利)</sup>  
成氏事、没落下総国云々、不移時日相催諸勢令進発、可励戦功候也、  
<sup>(文明三年)</sup>  
月日(九月十七日)  
上杉四郎とのへ

12 足利義政御内書写（御内書符案）

「同前（飯肥奉案文出之）」

今度上州立林城進發事，差遣上州・武州一揆輩并長尾<sup>（景信）</sup>左衛門尉以下被官人等，則時  
攻落之，數輩被疵之条，忠節異于他，弥可廻計策候也，  
<sup>（文明三年）</sup>  
同日（九月十七日）

上杉四郎とのへ

参考5 鑿阿寺宛長尾景信奉書禁制（鑿阿寺文書）

禁制

右，於足利庄鑿阿寺々中，軍勢甲乙人等不可致濫妨狼藉，若有違犯之輩者，可被処  
罪科状，如件，

文明四年六月 日 <sup>（長尾景信）</sup>  
左衛門尉（花押）

参考6 足利庄八幡宮宛長尾房清奉書禁制（永倉恵一氏所藏文書）

禁制

右，当社頭之用木等事，任先規之例，甲乙人等不可致受用，若有違犯之輩者，可被  
処罪科之状，如件，

文明八年八月 日 <sup>（長尾房清）</sup>  
平（花押）

足利庄八幡宮

参考7 如意藏主禪師宛奉行人連署証状（仏日庵文書）

<sup>（上杉顯定）</sup>  
就屋形出陣，可有精誠御祈禱，仍武州<sup>（稻）</sup>□毛庄鞠兒郷山王之參錢事，淺草寺輪藏堂江  
我等致申沙汰，永代御寄進<sup>（候）</sup>□也，然者於以後傍輩中，時之代管以下狼藉，或不可有  
邪儀，若無沙汰之時，我等於子々孫々堅加意見，可致其成敗於，又者彼輪藏堂，停  
止諸役，年始歲末<sup>（御出）</sup>□□陣之御祈禱簡要候，加様申定候事，全不可有為也，為子孫繁  
昌也，<sup>（南無）</sup>□□大悲觀世音，現世安穩，後生善処，仍為後日証状如件，

<sup>（文）</sup>  
□明九年（丁酉）五月十四日 式部尉治家（花押）

如意藏主禪師 隼人佐常秀（花押）

参考8 教念寺力宛奉行人連署奉書禁制（教念寺文書）

禁制

一、於当寺門前押買狼藉事，

一、郷質不可取之事，

一、博奕事，

右条々，所被制止也，若有違犯之輩者，可被処其科之由候也，仍執達如件，

文明十三年三月廿日 右馬允（花押）

左近将監（花押）

13 赤堀上野介宛書状写（赤堀文書）

息彦四郎事，為善三河守名代，兼日被申合上者，尤不可有相違候，恐々謹言，

(文明十四年)  
閏七月廿五日 顯定

(政綱)  
赤堀上野介 殿

14 赤堀上野介宛感状（赤堀文書）

去十四日長尾藏人并佐野周防守同心ニ，善・山上取立候地へ差懸，終日相攻候処，不移時合力候故，敵退散，手負数多，四五人被討捕候由注進，其動誠心地好感入候，於向後も弥無油断，被加力肝要候，恐々謹言，

(長享元年)  
十二月十八日 顯定（花押2）

(政綱)  
赤堀上野介 殿

15 赤堀上野介宛感状（赤堀文書）

(懸紙上書)  
「赤堀上野介 顯定」

一昨日七日，長尾右衛門尉張陣地へ，取鳥之諸軍差懸候処，不及一戰退散，併其方動故候条，誠感悦無極候，弥可被勤忠節候，巨細長尾平五可相届候，恐々謹言，

「長享二年二月九日」

二月九日 顯定（花押2）

(政綱)  
赤堀上野介 殿

16 赤堀上野介宛書状（赤堀文書）

葛塚之要害へ佐野周防守差懸相攻之間，及防戰砌，速有合力得勝利，敵手負死人数多，至于御方も同前，其動心地好感悦候，於向後も無油断，現形義候者，不移時刻

可被加力候，周防守事後御方候由 上意，然而如斯慮外之揺，不思議之次第候，旨趣言上之所，断而可被成御咎之段，被仰出候，恐々謹言，

(長享二年)  
三月十六日 顯定 (花押 2)  
(政綱)  
赤堀上野介 殿

参考 9 赤堀上野介宛長尾定明副状 (赤堀文書)

(懸紙上書)  
長尾平五

謹上 赤堀上野介殿 平定明」

上州深巢郷・同橋江郷之内橋江掃部助跡等之事，如御望被成 御判候，御面目之至候，弥可被励御忠節候，謹言，

(長享二年)  
五月廿一日 平定明 (花押)  
(政綱)  
謹上 赤堀上野介 殿

17 中条弾正左衛門尉宛書状 (中条文書)

(懸紙上書)  
『長享二 十二月五日』

中条弾正左衛門尉殿 顯定 」

(足利政氏)  
御方御所様于今横田御張陣候，去十五日合戦之時，手負死人数多候上，御勢衆相帰候，此砌成行候者，本意不可有疑候，以十日之用意，不移時日着陣候者，可為大慶候，委細尻高左京亮 可伝語候，恐々謹言，

(景清)  
(長享二年)  
十一月廿三日 顯定 (花押 2)  
(定資)  
中条弾正左衛門尉殿

18 判門田鶴寿宛書状写 (蔭涼軒日録延徳四年六月五日条)

顯騰西堂建長寺公帖事，無相違様相心得可達 上聞候，謹言，

(明応元年)  
三月晦日 顯定判

判門田鶴寿殿

19 長尾信濃守宛書状写 (伊佐早謙採集文書十二)

(上杉房能)  
自堀内之文箱等給候，毎年懇之条難謝候，向後弥対堀内無等閑候者，本懐満足候，仍徳惠首座帰路二委細被申越候，喜悅候，国中速静謐目出大慶候，猶以無油断様意見肝要候，疵未思様候哉，被用印判候，無心元候，定漸々可為自由候歟，将又於相

(長尾景春) (長尾景英)  
州同名左衛門入道，向取立陣城對陣，既去四日差寄處，右衛門尉其外打出，遂一戰，  
得勝利，為始伊勢弥次郎宗者數多討捕，驗到來本意候，如斯之上，大森式部少輔・  
(上杉朝昌) (藤頼力) (宗瑞)  
刑部大輔・三浦道寸・太田六郎右衛門尉・上田名字中并伊勢新九郎入道弟弥次郎  
要害自落，西郡一變，至于東郡進陣，上田左衛門尉要害実田近陣處，治部少輔打越  
(正忠) (上杉朝良)  
候，有行之旨，左衛門入道入馬候由，注進到來之間，彼国へ可進發義定候，当地事，  
(足利政氏) (上杉憲清カ) (上杉定為)  
公方様被立 御旗候間，為御警固，疋鼻和三郎・同藏人大夫・上州一揆等差置  
候，巨細重可申送候，恐々謹言，  
(明応五年)  
七月廿四日 顯定(花押2)  
(能景)  
長尾信濃守殿

20 裏封文書目録(上杉文書)

目録

- 一、豆州平井郷事，〈付長棟庵主御証狀二通／次長尾(実忠)大炊助書狀一通〉  
(上杉憲実)  
一、越州曾祢村事，付持地院評定衆相博之連署一通，  
(裏花押2)  
一、丹州漢部村事，付長棟庵主御証狀一通，  
合五通，  
明応五年七月 日

21 二階堂左衛門尉宛書狀写(静嘉堂本集古文書シ)

(懸紙上書)  
「謹上二階堂左衛門尉殿 藤原顯定」  
(輔胤)  
永々御陣勞誠令識察候，千葉介入道未応御下知候哉，無是非次第候，速御静謐御帰  
座念願此事候，曾可為御同意候，委曲期後信候，恐々謹言，  
(文龜三年)  
七月九日 藤原顯定(花押2)  
(政盛)  
謹上 二階堂左衛門尉殿

22 神保孫太郎宛書狀写(新編会津風土記二)

(宗瑞)  
自長井次郎方切紙，只今申刻到来，写進之候，伊勢新九郎入道出張必然，然者小幡  
(景高カ)  
右衛門佐同心ニ以夜繼日可有着陣候，努々不可有遲延之義候，恐々謹言，  
正月七日 顯定(花押2)  
神保孫太郎殿



\*本文書以下、30号文書までは、花押2段階のものであるため、ここに収録する。

23 赤堀孫太郎宛書状写（赤堀文書）

淵名庄之内、今度不儀之人等相抱地之事、於復先忠之上、知行不可有相違候、恐々謹言、

三月廿六日 顯定  
(政綱)  
赤堀孫太郎 殿

\*花押はないが、本文書は文明十二年以前と推定される。

24 三田弾正忠宛書状（谷合島太郎氏所蔵文書）

就向其口敵相動進、只今戌刻到来、火手見候上無心元候間、長尾修理亮<sup>(顯忠)</sup>其外至于高倉差越候処、敵入馬候由、告来候間、至于酉刻帰陣、今日刷之次第、被露紙面候、無是非候、櫛田事大切候、彼地へ動候者、則被馳籠、堅固之備肝要候、恐々謹言、

三月晦日 顯定（花押2）  
(氏宗)  
三田弾正忠 殿

25 赤堀親類同道宛書状（赤堀文書）

<sup>(懸紙上書)</sup>  
「赤堀親類同道御中 顯定」  
(赤堀政綱)  
向当城逆徒張陣候哉、此刻上野介相談、励忠節候者、可為感悦候、恐々謹言、

五月十七日 顯定（花押2）  
赤堀親類同道御中

26 臼田勘解由左衛門尉宛感状（臼田文書）

於去八日青鳥原合戦之時、被疵之条、感悦候、弥可励戦功候、謹言、

六月十七日 顯定（花押2）  
臼田勘解由左衛門尉殿

27 雲洞院衣鉢侍者禪師宛書状写（雲洞庵文書）

当庵領越州頸城郡苜田并福光事、以同国上田庄馬場郷内桐沢分、如御競望令相博候、然者御所務不可有相違候、此段可得尊意候、恐惶敬白、

六月廿八日 藤原顯定（花押2）

拝進雲洞院 衣鉢侍者禪師

参考10 雲洞庵侍者宛尻高景清書状（雲洞庵文書）

当庵之御事，善実へ御与奪之由，披露仕候，雖然今日迄者是非不被申候，次長慶庵事，善隆書記可有掃治由尊意，尤心得申候，此段可被得尊意候，恐々敬白，

六月十四日 <sup>(尻高)</sup>  
左京亮景清（花押）

雲洞庵

拝復 侍者御中

28 赤堀上野介宛書状（赤堀文書）

熟瓜給候，賞翫候，恐々謹言，

七月十八日 顯定（花押2）

<sup>(政綱)</sup>  
赤堀上野介 殿

29 太田源六宛書状写（古簡雜纂六）

昨日書状，只今申刻於平原陣披見，去十六以来，連日被相勤候哉，尤肝要候，仍定正陣所箕田へ差懸候处，堀須江被馳参候，荒川端不自由上，切所候間，諸軍揺難有之候間，自成田江打廻，為可懸一戦，平原江移陣候間，明日可為仰候，此砌其口揺専一候，千葉介自胤着陣間，兵儀等弥可心安候，早々出陣待入候，恐々謹言，

十月廿日 顯定

<sup>(資康)</sup>  
太田源六 殿

\* 花押はないが，本文書は長享二年から明応二年までのものである。

30 土肥中務少輔宛書状（光明寺文書）

相州光明寺領南金井事，下地被相抱，於寺納者，不可無沙汰給候，恐々謹言，

十一月九日 藤原顯定（花押2）

謹上 土肥中務少輔殿

31 穴沢二郎右衛門尉宛書状（穴沢文書）

初鱈到来，喜入<sup>(候)</sup>□，謹言，

十一月九日 顯定（花押2）

(後欠)

「穴沢二郎右衛門尉殿」

\*宛所は「歴代古案六」所収本文書写によって補う。

32 矢野安芸守宛書状写 (紀伊国古文書藩中古文書十二)

永々在陣故，自駿州御厨帰宅，先以非無理候，既追日彼陣無勢之上者，以夜繼日打越候者，可為感悦候，遅々不可宥曲候，謹言，

(永正元年)  
四月三日 顕定

(憲信)  
矢野安芸守殿

\*「永正元年也」との注記あり。

33 大森式部大輔宛書状写 (相州文書足柄上郡)

先刻如啓候，治部少輔并今川五郎・伊勢新九郎 入道対陣，於軍者可御心安候，既公方様御発向之上者，不移時日自身出陣候者，武田五郎方へ被届可然候，遅々不可

有曲候，巨細長尾右衛門尉可申述候，恐々謹言，

(永正元年)  
九月廿五日 顕定 (花押 3)

(定頼カ)  
大森式部大輔殿

34 大熊伊賀守宛感状写 (記録御用所本古文書一)

於今日河越符河口ニ，太刀打之時，息左近将監討死，誠ニ神妙，心底推察候，弥励忠節候ハヽ，可為感心候，謹言，

(永正元年カ)  
十一月廿六日 顕定在判

大熊伊賀守殿

35 佐竹右京大夫宛書状 (佐竹文書)

去十五日簡札一昨日到着，具披閱，抑旧冬招越越州衆進発，然間武・相両州敵城，或自落，或攻落候故，速静謐，依之懇切承候，快悦之至候，仍治部少輔朝良令隠遁，名代事彼家老若嘆候間，言上之处，可被相任之段，被成御書候，如斯之上，号当所須賀谷地へ移候，爰元事，先以可御心安候，余者期後信候，恐々謹言，

(永正二年)  
四月廿三日 藤原顕定 (花押 3)

(義舜)  
謹上 佐竹右京大夫殿

36 築田右京亮宛書状写 (静嘉堂本集古文書子)

去月廿七日簡札昨日到着，具披閱，抑兩公方様御間事<sup>(足利政氏・高氏)</sup>連続，既可被及御取合趣候，都鄙批判歎有余計候，定可為御同意候，御□為<sup>(無)</sup>之一儀，雖令御言上候，何茂無御信用候，如今者不計時宜出来不可有疑候，併関東破滅之基候，供奉之面々奉進由聞候，不思議次第候，息八郎方并下野守方断而被申越候，可然候，仍三浦陸奥入道道寸渡海，構地利候間，対陣候歟，然者致帰郡候様可廻行旨，被仰出候間，奉得其意候段，捧御請候，為已後一篇，彼伯父刑部少輔入道光迪方へ可申送候，○道寸退散不可延候，遠路故節々不馳一筆候，相似疎略候哉，恐々謹言，

(六) (永正三年)  
□月七日 藤原顕定  
(田) (政助)

謹上築□右京亮殿

\* 欠損部分は「松平義行所蔵文書」本文書写によって補う。

37 足利高氏契状写 (国会本喜連川家文書案)

御宥免之事，可有申沙汰之由，度々依被仰出，中途参上，以代官言上之处，上意御同篇候哉，且無御余儀，且令恐怖，於此上者存孝義外不可有之候，非偽之段，八幡大菩薩・春日大明神可有照鑑候，如斯之旨趣被達高聞，速入眼之様被申成候者，可為感悦候，巨細申含円觀首座候，恐々謹言，

(永正四年) (足利)  
八月三日 高氏

四郎殿

38 足利政氏書状写 (秋田藩家蔵文書)

寺領之事，定明月院可被届候，嚴重長尾修理亮仁被申附，速還附之様其刷可然候，<sup>(顯忠)</sup>  
努不可被存疎儀候，巨細政助可申遣候，恐々謹言，<sup>(築田)</sup>

二月十三日 政氏 (花押)<sup>(足利)</sup>

四郎殿

\* 本文書以下，48号文書までは，顕定の在俗段階のものであるため，ここに収録する。

39 長谷川刑部大輔宛書状 (長谷川文書)

連々啓々上者，□□進発之砌，□可被露御色段可申，宜御国中可立馬条，不義定故

及思慮候，仍可成惣調義間，<sup>(足利政氏)</sup>公方様へ御代官言上之旨ニ候，然者動之刻被仰候者，可為本意，依回答可得其意候，恐々謹言，

二月廿八日 顕定（花押）

長谷川刑部大輔殿

40 細川政元披露状写（御内書引付）

御書謹以拝見仕候畢，抑御太刀一腰包貞・金十兩拝領仕候，祝着畏入候，仍御太刀一腰末行・御建盞・同台推紅・御盆一枚推朱進上申候，以此旨可預御披露候，恐惶謹言，

二月卅日 <sup>(細川)</sup>右京大夫政元

謹上 上杉四郎殿

<sup>(足利政氏)</sup>是ハ関東主君様へ御書也，表卷ニハ御裏書在之，

\*本文書は明応二年から永正四年までのものである。

41 穴沢次郎右衛門尉宛感状写（歴代古案六）

去十一日上州大胡・小泉要害相攻之時，被疵之条，神妙ニ候，弥可励忠節者也，

三月十五日 顕定

穴沢次郎右衛門尉殿

42 一宮左衛門宛書状写（上野国一宮板鉾大神古来御由緒順書）

出陣事度々申届候処，不被及参陣候間，雖催促無益候，為以後一篇実意，不移時々可為着陣，各速被申越可得其意候，恐々謹言，

三月廿七日 顕定

一宮左衛門殿

43 書状断簡（榊原文書）

（前欠）

六月廿八日 顕定（花押3）

（後欠）

\*本文書は永正元年から同四年までのものである。

44 某(明月院)宛書状(明月院文書)

当院領相州六浦内塩場并関三ヶ所, 其外事, 如元御執務不可有相違候, 恐々敬白,

七月五日 顕定(花押3)

(後欠)

\*本文書は永正元年から同四年までのものである。

45 某(穴沢二郎右衛門尉カ)宛証文写(歴代古案六)

犬飼兵衛太郎申合境之事,

一, にこり又きたの峰境,

一, からす沢のきた峰境,

是ハ穴沢之内たるへく候, 仍為後証, 如件,

十月五日 顕定

(宛名欠)

46 土岐原源次郎宛書状(臼田文書)

臼田弥次郎并近藤八郎三郎被官原内匠助其外一兩輩相談, <sup>(勝秀)</sup>小田令内通, <sup>(政治)</sup><sup>(江戸崎城)</sup>当要害可乗  
取行現形之間, 彼逆心之族遂成敗候故, 于今堅固之由申越候, 目出大慶候, 臼田左  
衛門尉与還告知候段, 忠信神妙存候, 遣感状候, 可付届候, 弥不可有油断之義候,  
謹言,

十二月十四日 顕定(花押3)

土岐原源次郎殿

\*本文書は永正元年から同三年までのものである。

47 大蔵坊宛書状(内山文書)

歳末卷数一合給候了, 喜入候, 恐々謹言,

十二月十六日 顕定(花押3)

上州大蔵坊

\*本文書は永正元年から同三年までのものである。

48 足利政氏書札礼(国会本喜連川家文書案)

種々到来, 目出候, 恐々謹言,

月日

四郎殿

昔ハシンノ謹言ハカリ也、乱裏ニ如此也、出仕之時、御劍ハ御一家シテ被下也、今度御陣ニテ一兩度被申間、直ニ被下之、於已後者如先々以御一家可被下也、又近年可諄切而申上故、恐々謹言ト被成之也、

49 大森式部大輔宛書状写（相州文書足柄上郡）

就当地滞留、懇切之書簡、快悦之至候、<sup>（足利政氏・高基）</sup>兩上様御一和事、可被任言上趣候、猶以申調最中候、爰元可御心安候、近日可帰陣候、仍越州之時宜、無差事候、珍題目候者、可啓候、次打匏給候、賞翫無極候、恐々謹言、

<sup>（永正四年カ）</sup>  
八月十四日 可諄（花押3）

<sup>（定頼カ）</sup>  
大森式部大輔殿

50 色部修理進宛書状（色部文書）

<sup>（懸紙上書）</sup>  
「『永正五 三 十七 御到来』」

色部修理進殿 可諄」

房能没命之砌、其口へ被退候哉、依之進退事被申越候、如何様以時節、<sup>（為景）</sup>長尾六郎方へ可相届候、不可有退屈候、恐々謹言、

<sup>（永正五年）</sup>  
二月十九日 可諄（花押3）

色部修理進殿

51 平子牛法師宛書状（平子文書）

<sup>（懸紙上書）</sup>  
「平子牛法師殿 可諄」

其方幼稚之間、為代可被走廻之段、伯父又四郎ニ申付候処、万端退屈之間辞候由、被申越候、畢竟被官人成専自由刷等不足故候歟、又四郎覺悟誠無余義候、如此間候者、何ヶ度も可為同篇候哉、一途申合可被相憑事可然候、直ニも加詞候、恐々謹言、

<sup>（永正六年）</sup>  
二月十四日 可諄（花押3）

<sup>（房長）</sup>  
平子牛法師殿

52 足利義植御内書写（御内書案）

伊野六郎与大井太郎確執之由、被及聞食候、不可然、閣是非、急度令和睦候様相調

者，可為神妙候，猶申含練江和尚候也，

(永正六年)  
五月三日

(憲房)  
上杉四郎入道とのへ 同五郎とのへ

53 某(平子牛法師力)宛書状写(武州文書御府内)

来廿八日必向越州可進發間，然者左衛門佐同心ニ不移時日，上田庄へ被打着，可有相談候，此趣親類同道中へ可被相届候，恐々謹言，

(永正六年)  
七月廿四日 可諄在判

「本書共越州へ御越候間，写之置也」

54 発知六郎右衛門尉宛書状(発知文書)

(景清)  
度々尻高左京亮方へ被申越旨候哉，然者此砌一段被露忠節候者，可為感悦候，恐々謹言，

(永正六年)  
七月廿六日 可諄(花押3)

猶々同名孫左衛門尉并左京亮所へ／口上之趣，尤調法簡要候，

発知六郎右衛門尉殿

55 平子牛法師宛書状(平子文書)

(懸紙上書)  
「平子牛法師殿 可諄」

杉一揆之輩近年令離散由候，然者如前々有同心，可被励忠節候事肝要候，子細候者可加詞候，恐々謹言，

(永正六年)  
八月廿八日 可諄(花押3)

(房長)  
平子牛法師殿

56 当郡杉一揆宛書状(平子文書)

(懸紙上書)  
「当郡杉一揆御中 可諄」

平子牛法師被相談，此砌被励忠節候者，可為感悦候，然者有勇様可相計候，恐々謹言，

(永正六年)  
九月一日 可諄(花押3)

当郡杉一揆御中



57 平子牛法師宛書状（平子文書）

（懸紙上書）  
「平子牛法師殿 可諄」

当一揆之輩，自今以後令離散候者，為恩賞，其跡事可被相計候，恐々謹言，

（永正六年）  
九月七日 可諄（花押3）

（房長）  
平子牛法師殿

58 法音寺宛判物（法音寺文書）

抑 為御勅願寺之上者，乱妨等并諸役堅可令停止之者也，仍如件，

永正六年〈巳巳〉

九月十八日 可諄（花押3）

久木村之

法音寺〈同／五所〉

59 毛利五郎宛書状（毛利安田文書）

三条要害事，以其方行，至于令落居者，大槻庄并平賀伊勢松跡事，不可有相違候，  
謹言，

（永正六年）  
九月廿一日 可諄（花押3）

（後欠）

「毛利五郎殿」

\*宛所は「諸家古案」所収本文書写によって補う。

60 平子牛法師宛書状（平子文書）

（懸紙上書）  
「平子牛法師殿 可諄」

越山以来同心之輩忠信感悦候，雖望之義等取合可落居候，既奥口敵之動現形之上者，

先令出陣可励戦功旨，可有意見候，然者有勇様可相計候，恐々謹言，

（永正六年）  
十一月十三日 可諄（花押3）

（房長）  
平子牛法師殿

61 足利義尹御内書写（御内書案）

伊勢八郎左衛門尉盛正知行分越後国松山保事，近年不知行由候，如元申付者可為神

妙，委細貞陸（伊勢）可申候也，

(永正六年)  
十二月廿四日

上杉四郎入道とのへ 同五郎とのへ<sup>(憲房)</sup>

62 久下信濃守宛書状写 (松平義行所蔵文書)

於三条要害際一戰，定可有其聞候，然者三島精進相過可進發議定之處，去十五日越  
中兵庫頭・長尾六郎<sup>(上杉定実)</sup>，佐州へ令渡海，一昨日廿蒲原浦へ移候，旁以出馬，可遂安否<sup>(為景)</sup>  
之一戰候，不可延候，累年忠信異于他上者，以夜繼日被馳着候者，弥可為感悦候，  
委細木部隼人佐可申越候，恐々謹言，

(永正七年)  
四月廿二日 可諄判

久下信濃守殿

63 長尾但馬守宛条書写 (歴代古案三)

去三日之書状同七日到來，再三披見，抑伊勢宗瑞至于武州出張，既櫛田自落，無  
人数之間，不可抱之段，兼日議定故，普請等及五六年止之間，城主由井移候歟<sup>(大石道俊力)</sup>，  
然間彼地翌日指懸候處，出合遂矢師，數多討捕由令注進候旨，雖不始事，石井帶  
刀左衛門尉働神妙候，定而可為同意候事，

一，雪下殿御造意連続，当太田之庄火ノ手見候歟，<sup>(空然)</sup> 公方様被对当方無御余儀之<sup>(足利政氏)</sup>  
所，如斯之御働，被就御孝心之上者，不及力次第二候，老拙不存無沙汰之處，候  
人二紛故，慮外之御擬，旁以天道二被相背上者，争可被免候哉，

一，大上様上意不相替累年上，豹德斎并成田下総守如申越者，社家衆露御色候者，<sup>(足利政氏)</sup>  
御発向御儀定，依之下総守方へ御書，次築田大炊助書状越候，如斯上者，不可有<sup>(顯泰)</sup>  
別条之間，御動座ノ事申上候者，尤同名中其相談，馳向宗瑞，可被遂一戰之段，<sup>(政助)</sup>  
可為大感候，連々出語此時候，

一，鉢形・忍兩城堅固專一之由二候，此一儀專申遣候，<sup>(上杉朝良)</sup> 治部少輔入道建芳毛頭無疎  
略，定而可有其聞，当国進發之砌，互二露神名，以自筆成誓書故候，是又可心安  
候，孫太郎出陣之事頻催促，太田大和守度々折簡來候，<sup>(長尾顯方)</sup> 顯方諸每可申合候段，<sup>(資高)</sup>  
伊玄方參陣之一揆中如書中者，帶刀左衛門尉号物詣馳候，<sup>(長尾)</sup> 一点不和之由，断而載  
誓詞候，然而去七日夜中令自火，伊玄退之趣，方々ノ説同前二候，半信半疑候，  
事实者落所以夜繼日可被申越候，

一，当国凶徒連續付而，參陣之儀二候歟，断而雪下殿御企無紛故，見合遅々，同名  
掃部助可被下之處，宗瑞出張之間延引，得其意候，

一、相背伊玄・帶刀左衛門尉・吉田一類<sup>〔里〕</sup>、津久井山ニ移候、宗瑞一味候哉、如詞先段<sup>〔顯〕</sup>、  
 伊玄進退同前之様聞候、不思議之次第、於同名老中為憚身、一代兩度之不儀、併  
 当方并名字中時節到来迄候、如何覺悟候哉、  
 一、御方御所様連々御退屈故、関宿ニ被移御座候歟、言宣不及候、被当方始末〇可有<sup>〔不〕</sup>  
 御等閑之段、被載御誓詞御書、至于今兩年度々拝領、各所御同前、雖平人身上候、  
 争可黙候哉、況関東之主君、被抛御誓詞、被求禍乱、社家於被与者、何ヶ茂不入  
 処候、但日月光不消者、一度其効可有之歟、世上此願迄ニ候、  
 一、上条弥五郎相馳砌<sup>〔上杉定憲〕</sup>、寺泊要害為始<sup>〔上杉憲明〕</sup>長茂張陣之衆被除以来、各屋敷打明候間、  
 同名六郎至于寺泊出張、先衆号椎屋山地執陣間、一昨日七日憲房被<sup>〔上杉〕</sup>及近陣候、然  
 而平五郎・上州一揆相重軍不可延<sup>〔長尾為景〕</sup>、勝利不可疑<sup>〔長尾房景〕</sup>、去六日於蔵王堂同名弥四郎遂一  
 戦、六郎傍輩・被官宗徒者百余人討捕、驗到来不知数、残党数百信濃川へ追入候、  
 如斯間、揚河南者三条・護摩堂計敵相踏候、其外悉復候、黒滝要害之事者、  
 八条修理・桃井一類在城堅固ニ候、寺泊六郎等取不除様廻行候、去月信濃口  
 高梨衆・同牢人等打出、上郷江相散、号板山地ニ執陣候間、廿八・九兩日自当府  
 遣勢、可被懸之所敗北<sup>〔取〕</sup>、是又可心易候、則雖可及返章候、不得寸隙之上、方々時  
 宜為可申遣遅々、非其沙汰候<sup>〔無〕</sup>、千言万句関東之様体大切ニ候、六郎寺泊於令退散  
 候者、必々可帰国候、其間堅固念願候、重而注進相待計候、恐々謹言、

永正七年六月十二日 可諄

<sup>〔景長〕</sup>  
 「長尾但馬守殿」

\*宛所は「新集古案」所収本文書写によつて補う。

64 長井左衛門大夫宛書状（島田文書）

改年之佳慶、雖事旧候、猶不可有際限候、仍樽・肴兩種給候、怡悦候、恐々謹言、

正月廿四日 可諄（花押3）

長井左衛門大夫殿

\*本文書以下、70号文書までは、法名可諄段階のものであるため、ここに収録する。

65 長尾左衛門入道宛書状写（松平義行所蔵文書）

久下信濃守事、累年相守当方、忠節異于他候、寔可被聞及候、仍近日可参宮分候、  
 然者東海道於可透候間、往還無相違様、伊勢宗瑞方へ懇被申越候者、可喜入候、恐々  
 謹言、

正月晦日 可諄判  
(伊玄)  
長尾左衛門入道殿

\*本文書は永正五年から同六年までのものである。

66 江口縫殿助宛官途状 (江口文書)

縫殿助所望事，不可有相違候，恐々謹言，

四月五日 可諄 (花押3)

江口縫殿助殿

67 宗徳院宛書状 (海蔵寺文書)

依被加尊意候，英潭首座早速被越候，御厳密之至，不勝喜謝候，連雨故所々洪水，  
万一可有遅延敷之旨推察，周歛首座兼日申付候之間，今度者先潭首座帰寺候，方々  
時宜，付与彼口上，不能重説候，恐々敬白，

九月廿一日 可諄 (花押3)

宗徳院

68 明月院宛書状 (明月院文書)

斎銘事，令申候処，書給候，歡喜此事候，忠孝専之段，殊本意満足候，祝詞自是可  
申宣之間，抛筆候，恐々敬白，

十二月廿一日 可諄 (花押3)

明月院

侍司

69 大石源五郎宛書状写 (御府内備考続編二)

鑄木兵部少輔事，父美濃入道以来，对当方粹忠信候，然者每事不可有疎略候，謹言，

十二月廿六日 可諄判

大石源五郎殿

70 色部修理進宛書状断簡 (色部文書)

「被罷越候而，可然様可被相」

「□□□」「□部修理進殿」

「為□」「□□相任候本意」「□」  
「能々」「塩味可」「恐々謹言」  
「□□□□」「諄（花押3）」  
「□□□□」  
「修理」「十五日 可諄（花押3）」  
(懸紙上書カ)  
「色部修理進殿 可諄」

\*台紙に八行が貼付されている。

参考11 波多野次郎左衛門尉宛長尾顕忠副状（雲頂庵文書）

小磯遠江守跡事，<sup>(当)</sup>□知行子細可相尋之由，被仰出候之間，如此申[ ]，聊示給  
可令披露□，帶御判被相抱候[<sup>(ハハ、可カ)</sup>]有出帶之由候，恐々謹言，  
五月十二日 <sup>(長尾)</sup>修理亮 <sup>(忠)</sup>頭□（花押）

謹上 波多野次郎左衛門尉殿

\*本文書は明応七年から永正六年までのものである。

参考12 鑊阿寺宛長尾景長奉書禁制（鑊阿寺文書）

制札

右，於鑊阿寺，甲乙人等不可致狼藉，若有違犯輩者，可被処罪科之状，如件，  
五月日 <sup>(長尾景長)</sup>平（花押）

\*本文書は明応五年から永正九年までのものである。

花押1



花押2



花押3

